ISSN 1880-585X

sendai-city chronicles communication paper.

# せんだい 市史通信

第33号
仙台市博物館
市史編さん室

『明治元年現状仙台城市之図』(仙台市博物館蔵)に見える射撃場

地形図に見える台原の射撃場跡付近
上:明治40年、下:平成20年

## せんだい 今 昔
## 調練場の記憶

青葉区台原では小学校と中学校の敷地が南北に連なっているのはご存じでしょうか?「小学校と中学校が並ぶのは珍しくないよ」と言われるかもしれません。確かに仙台市内でも小学校と中学校がお隣さんという例を幾つか見ることができますが、台原はちょっと事情が違うのです。

小高い位置にある台原中学校から斜面を下ったところに台原小学校があり、その延長上に障害者職業能力開発校が並びます。その先はマンションや宅地、そしてみやぎ生協の店舗と続きますが、平成12年(2000)までその場所は県の警察学校の敷地でした。つまり、台原中学校から警察学校まで、幅約100メートル、長さ1キロメートル弱の細長い範囲に、4つの公的施設が一直線に並んでいたのです。改めて地図を見ると、「なんだろう」と思わせるような配置です。

タネ明かしをしてしまえば、ここは戦前に陸軍の射撃場として用いられた場所だったのです。ちょうど仙台の市街地から一段高くなったテラスのような地形で、北側は現在の台原森林公園も含めて、山林になっていました。こうした地形を利用して、南から北に向かって銃や大砲を撃ち、山の斜面に着弾するような構造になっていたのです。

仙台における陸軍の訓練場としては、宮城野原の練兵場(現在の宮城野原公園総合運動場一帯)や川内追廻の練兵場がよく知られていますが、他にもこの台原の射撃場や角五郎の練兵場がありました。このうち、宮城野原はもともと藩主専用の狩場、川内追廻は藩の馬場、角五郎は藩が江戸時代末期に設けた講武所の付属施設を引き継いだものでした。そして、台原の射撃場もやはり江戸時代以来の由緒をもつ施設なのです。

江戸時代後期、外国船が日本沿岸にしばしば姿を見せるようになり、幕府や諸藩は軍備の拡充という課題に直面します。文化5年(1808)、蝦夷地にロシア船が来航したことを受け、幕府は仙台藩に蝦夷地への出兵を命じます。この時藩は2000人ほどを派遣しますが、出発に先立って榴岡と杉山台で調練(=軍事演習)が行われました。さらに出発時には杉山台で行列を整えています。この杉山台が、台原の別称なのです。

その後、台原ではしばしば藩の調練が行われるようになりました。嘉永3年(1850)ころの作と言われる『仙台年中行事絵巻』には「藩主狼烟(のろし)御覧の図」があり、「中秋(=旧暦の8月)」のころに砲術などの調練が行われ、藩主が参観するだけでなく、近在の「老若」も多数見物に訪れると記されています。ただ、「藩主狼烟御覧の図」に描かれた調練の場は特別に区画された様子は見られず、台地上の原っぱのままだったのかもしれません。

安政2年(1855)以降、台原では西洋式大砲の製造が行われるようになり、調練の主体も西洋式の小銃射撃となりました。そうした変化を受けて、現在区画に残っているような細長い射撃場が造成されたようです。明治元年(1868)に描かれた仙台の鳥瞰(ちょうかん)図では細長い区画の先に小山が描かれており、銃砲専用の射撃場が作られた様子がうかがえます。現在の台原小学校、中学校の土地には、黒船の来航と密接に関係した調練場の記憶が埋まっているのです。

歩いて実感 仙台の歴史 ―『仙台市史 特別編9 地域誌』刊行記念

# せんだい地域誌さんぽ その4

## 源頼朝も通った！？～泉区を横断する往古の道編～

古い道といえば、江戸時代の奥州街道など、平野部を南北に貫く道に注目が集まりがちです。
でも、平野部と山間部とを結ぶ東西の道も、もちろんありました。
今回は泉区を舞台に、遠く南北朝時代、さらには源頼朝の時代にまで遡るかもしれない東西の道を、歩いてみましょう。

### 1 県道泉塩竈線に寄り添いながら

今から約650年前の南北朝時代、陸奥国の政治・経済の中心だった府中（岩切周辺）をめぐり、中院守親（なかのいんもりちか）ら南朝軍と吉良（きら）貞家ら北朝軍との間で合戦が起こりました。戦場は道庭口（市名坂字筒場と思われます）。この時に南朝軍は、拠点の黒川郡吉田城（大和町）から根白石付近を経て、一名坂城や小曾沼城へと進出しています。

南朝軍は恐らく、朴沢か根白石字堂所を経て小角へと南下し、泉中央の手前までは現在の県道35号（泉塩竈線）とほぼ同じルートで東へ向かったと考えられます。昔の人は水はけや地盤の良い場所を選んで移動したようで、道は山や丘陵沿いに作られ起伏が多くなります。泉塩竈線は、そんな古い道の雰囲気を今も残しています。

ですが、泉中央より東側となると話は別です。平地を直線的に走る現在の泉塩竈線に古い道の面影は皆無。その北側の丘陵麓を蛇行して走る道の方が、古い道の条件に合致しています。現在も残るこの道が、南北朝時代まで遡る道のようです。

さて、南北朝時代からさらに約150年前の平安時代末、源頼朝が平泉藤原氏を滅ぼした奥州合戦が起こりました。その際の頼朝の足取りの1つとして、陸奥国の行政拠点であった多賀国府から七北田川沿いを西へ向かったのち、北へ進路を変えて平泉を目指した可能性が考えられています。おそらくそのルートは、南北朝時代の南朝軍の進軍路を逆にたどるルート。自動車行き交う泉塩竈線を、南北朝時代の軍勢や頼朝も通ったのかもしれません。

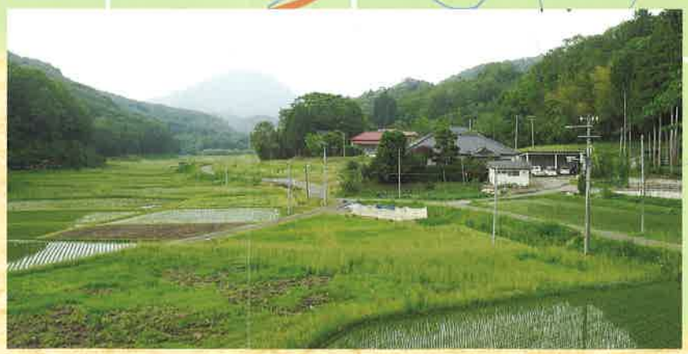
県道泉塩竈線の泉パークタウン入口交差点から西を望む　蛇行しながら丘陵を登る泉塩竈線が、古い道の面影を残している

### 2 堂所でタイムスリップ！

現在、根白石と宮床（大和町）を結ぶ道といえば、朴沢を経由する国道457号が一般的。ですが、堂所の集落を経由して根白石と宮床を結ぶ道も用いられた時代がありました。

堂所の集落には、堂庭廃寺と呼ばれる10世紀ころの寺院の跡があり、遠く平安時代にも人びとの活動のあったことが窺えます。また、山裾に屋敷が点在する集落の風景は、江戸時代以前に遡りそうな雰囲気を保っています。集落から北を望めば、七ツ森の笹倉山（大森）。きっと道行く人の恰好の目印だったのでしょう。

堂所を通る道は、おそらく平安時代までは遡ることのできる道。森の奥から迫り来る笹倉山の絶景を眺めつつ、往古の旅人気分を味わってみてはいかがでしょうか。



堂所の集落から北を望む　集落に入り北に進むと、笹倉山が姿をあらわしてくる

### 3 七北田川の西を行く？東を行く？

泉塩竈線唯一の七北田川渡河点には、鼻毛橋が架けられています。国道457号を南下し、泉塩竈線で東へ向かうには必ず通過する場所です。橋の西側には小岳館・福沢城など戦国時代の城跡があり、どうやら中世にも鼻毛橋周辺で川を渡っていたようですが、このルートで堂所から南下すると、七北田川を渡り、西田中川を渡り、もう一度七北田川を渡りと、少し苦労が多そうです。

鼻毛橋の少し東に、七北田川に架かる年川橋から南下する道と、泉塩竈線との合流点があります。道沿いには神社や仏堂があり、どうやら古い道のようです。年川橋周辺は鼻毛橋周辺と似た地形で、川を渡る苦労に違いはなさそう。この道なら西田中川を渡らずにすみ、もしかすると鼻毛橋周辺で川を渡るルートと同じくらい重要なルートだったのかもしれません。

現在は、道路や橋が整備され、渡河点は固定されています。でも昔は、目的地の方角や川の状態によって、渡る場所を変えていたかも知れません。一度鼻毛橋あたりに足を運び、自分ならどの道を歩き、どこで川を渡るだろうかと、考えをめぐらせてみるのはいかがでしょうか。

七北田川に架かる鼻毛橋（上）と年川橋（下）

### 4 松森に残る戦いの記憶

泉塩竈線を東へ進み松森に至ると、府中は目と鼻の先。そんな位置関係もあってか、松森には戦いの記憶が土地に刻まれています。たとえば松森字陣ケ原は、奥州合戦の際に源頼朝が軍勢の野営地に指定した「ちむのはら」と考えられ、平安時代末の合戦の記憶が地名として刻まれています。また松森城跡は遺構が良好な状態で残っており、戦国時代の山城の記憶が土地そのものに刻みこまれています。

その松森城の南麓に、内町、前沼の字名（あざめい）があります。内町は松森城の城下集落、前沼は堀跡で、2つの字の間を走る1本の道路は江戸時代の絵図などにも描かれています。おそらく松森城が機能した戦国時代までは遡ることができる道なのでしょう。

私たちが日々の生活に利用している道ですが、かつては鬨（とき）の声が聞こえ矢が飛んでくる、そんな道だったのかもしれません。

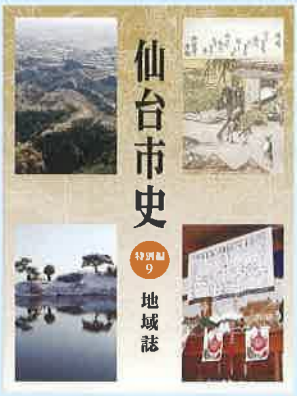
『野初絵図』（宮城県図書館所蔵）に描かれた松森城付近　青色で表現された堀と松森城の間を東西に走る道路がわかる

## 最新刊好評発売中

第31回配本 **特別編 9**

# 地域誌

オールカラー　B5判　596頁
本体価格5,714円（税別）




私たちが日々暮らしている仙台市。ひとくちに「仙台市」といっても、そのなかには地域それぞれの特色があります。西に奥羽山脈を抱え、東は太平洋に至る広大な市域は、高くそびえる山々、川が作る深い谷、起伏の大きい丘陵地、川の下流域に広がる平野など地形もさまざまで、山側と海側は天気にも違いが見られます。そのような土地で暮らす人びとの営みは、それぞれに独自の文化を育んできました。

青葉区・宮城野区・若林区・泉区・太白区で構成される現在の市域は、今から120年ほど前の明治22年（1889）に成立した仙台市と、その周囲に成立した泉岳村（のちの根白石村）・七北田村・岩切村・高砂村・大沢村・広瀬村・原町・七郷村・秋保村・生出村・西多賀村・茂ケ崎村（のちの長町）・中田村・六郷村の14町村が合併や編入を繰り返し、形成されてきました。『地域誌』では、これまで『仙台市史』で取り上げられることが少なかった、旧城下を除く14地域それぞれについて、地域の概要、原始から現代までの歴史、文化財、さらに「特論」を設けて紹介しています。「特論」は各地域に象徴的なことがらを扱ったコラムとなっており、たとえば根白石地域の泉ケ岳、七郷地域の霞目飛行場、秋保地域の秋保温泉の歴史、岩切地域では東光寺と青葉山の霊場としての関わり、大沢地域に今も残る正月迎えの切紙「おかざり」や六郷地域でよく目にする居久根（イグネ）といった、昔は市域でよく見られたけれども、現在はこの地域でしか見られなくなったことがらを取り上げています。

原町苦竹の道知るべ石

また、地方制度として重要な行政単位であった時代の「郡」についても取り上げています。14町村のうち8町村が宮城郡、6町村が名取郡に属していたことから、その2つの郡について、成り立ちや役割を紹介しています。

いま自分が暮らす地域。そこはかつてなんと呼ばれ、どんな特徴を持つ土地で、人びとはどのような生活をしていたのか。この本をもとにして振り返ってみるのはいかがでしょうか。

井土浦　平成4年

戦前の秋保温泉（仙台市博物館蔵）

目次


第一章　総論
第一節　概説
第二節　地方制度の変遷と宮城郡・名取郡
第二章　地域誌
第一節　根白石
第二節　七北田
第三節　岩切
第四節　高砂
第五節　大沢
第六節　広瀬
第七節　原町
第八節　七郷
第九節　秋保
第一〇節　生出
第一一節　西多賀
第一二節　長町
第一三節　中田
第一四節　六郷


## 仙台の歴史を掘り下げる
# 「仙台市史」好評発売中！

◎次回刊行予定
年表・索引

通史編／2,858円（税別）　特別編／5,714円（税別）
資料編／3,810円（税別）　※板碑のみ4,762円（税別）
1冊ずつお求めになれます

**通史編**　1原始 ※改訂版とセット販売になります　2古代中世　3近世1　4近世2　5近世3　6近代1　7近代2　8現代1　9現代2

**特別編**　1自然　2考古資料※完売しました　3美術工芸　4市民生活　5板碑　6民俗　7城館　8慶長遣欧使節　9地域誌

**資料編**　1古代中世　2近世1藩政　3近世2城下町　4近世3村落　5近代現代1交通建設　6近代現代2産業経済　7近代現代3社会生活　8近代現代4政治・行政・財政　9仙台藩の文学芸能　10伊達政宗文書1※完売しました　11伊達政宗文書2　12伊達政宗文書3　13伊達政宗文書4

県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで㈱宮城県教科書供給所へお申込みください。

発　売　元／㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL 022-235-7181　FAX 022-235-7183

お問合せ先／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26
TEL 022-225-3074


せんだい市史通信 第33号
発行年月日／平成26年7月31日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室　TEL／022-225-3074
〒980-0862　仙台市青葉区川内26　URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum



このリーフレットはリサイクルできます。「雑がみ」へ分別しましょう。